青森保健大雑誌　8(2), 225 − 236 , 2007

〔研究ノート〕

マドプール村の開発
−インド国西ベンガル州の少数民族の村の変化−

千葉たか子 [1)]

Development of the Madhabpur Village
− The Dynamics in a Village of Ethnic Minority in West Bengal, India −

Takako Chiba[1)]

Abstract

This paper illustrates the current picture of Madhabpur village, where the Santal people, one of the ethnic minority tribes, live in West Bengal, India, with a view to analysing the impact of the dynamics of development on the village.

The Santal are rich in culture but poor. Their origin is different from the mainstream population, and they were called forest people as they lived in forests and hills. They lived on hunting, fishing, gathering and shifting cultivation, which made them self-sufficient. They enjoyed a kind of isolation. They have their own economic life, traditional culture, and social value system. The Santal have a political body to administer the village, which consists of six senior members. Due to changes in and around their world, they were no longer able to maintain their life style. They have been facing the need to cope with these changes. The Santal are now chiefly engaged in agriculture, but many of them are land-less farmers and work as cultivators or workers employed on a day to day basis, where exploitation is commonly practised.

The government has implemented the Panchayat Raj system in villages, through which development schemes have been implemented. Social welfare associations and development NGOs also have introduced new development projects in villages. Therefore, Madhabpur village now has three authorities to follow: the state government, NGOs and the traditional authority. The village people are at the mercy of these new movements.

(J. Aomori Univ. Health Welf. 8 (2) : 225 − 236, 2007)

キーワード：サンタル民族、マドプール村、開発

Key words : Santal, Madhabpur village/hamlet, development

Ⅰ. はじめに

「多様性」と「混とん」。これらが、インドについて付される形容詞として最もふさわしいものだろう。実際、インドは、その国土面積の大きさによる地理学的な多様性もさることながら、世界第二位の10億2千万人（2001年国勢調査）を超える人々は、人類学的に、文化的に、社会的に、経済的に、多岐にわたり、世界に類をみない多様性を作り出している。そして、そのような様々な人々が、混在しつつ調和して生活を営んでいる。

1947年の独立以降、インドでは経済振興策がとられるようになり、農業用・工業用の土地、あるいは鉱山資源を求めて、主流民族が少数民族の住む土地へ進出するようになる。その結果、少数民族は彼らの生活を支えてきた森や草原など生活資源へのアクセスを失う。生活の糧から切り離された少数民族は、生活を支える為に労働市場へ出て行くようになる。

1）青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科
Department of Social Welfare, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

本稿で紹介するのは、インド国西ベンガル州バンクラ県にあるマドプール村[1]である。筆者は、この村の開発を推進するインドの開発NGO（後述）と協働で、2000年よりこの村の開発を支援してきた。この村には、ヒンドゥー社会を構成するアーリア人とは人種的に異なる起源をもつ少数民族であるサンタル民族[2]が住む。サンタル民族は、独自の社会的・文化的特徴を持ち、村は固有の伝統的行政組織で自治的に運営され、かつてはヒンドゥー社会と一定程度距離をおいて生活してきた。しかし、近年、開発の進展および労働市場への参入と共に、ヒンドゥーの村と近接して住むようになるなど、ヒンドゥー社会との関わりが深くなってきた。それは、ヒンドゥー化（Mukhopadhyay 2002：3；Ishtiaq 1999：15）への過程ともいえる。また、政府主導による開発プロジェクトも多数実施されるようになる。これらの開発プロジェクトの推進に当たるのは、伝統的行政組織とは関わりない、「近代的な」選挙に基づき選出された人々である（ちなみに伝統的行政組織の役割は世襲制である）。また、開発NGOなどの社会開発団体も農民グループや女性グループを組織して活動を推進している。

伝統的行政組織をもち、民族のアイデンティティーを守って暮らしてきた村の生活の中に、政府主導の開発プロジェクト、開発NGOのプロジェクト、そしてヒンドゥー化などの波が、そしてそれらがもたらす異なった価値観が入り込む。本稿では、マドプール村に働くこれら4つの動きを明らかにし、その影響について検討してみたい。

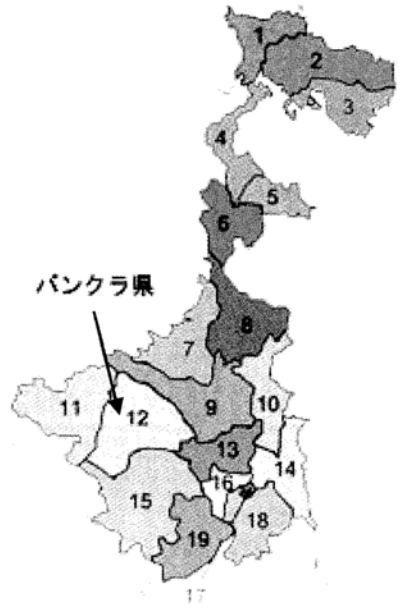
2　マドプール（Madhabpur Village）村の地理的概要

（1）　インド国西ベンガル州

インドは、面積3287,590㎢で、世界第7位の国土面積をもつ国である。28の州と6つの連邦直轄地域と首都圏デリーからなる（2007年）[3]。連邦制を採用しており、州によって政治体制も異なる。西ベンガル州では、1977年より、共産党（マルクス主義）が政権をとっている。首相は、バッダッデブ・バッタチャルジー（Buddhadeb Bhattacharjee、2007年4月）氏である。

西ベンガル州は、インドの東方に位置し、バングラデシュと接している。面積88,752㎢で、19の県（District）からなる（図1および表1　参照）。政治の中心であるデリー、経済活動の活発なムンバイ、ITが盛んなバンガローレに対して、西ベンガル州は文化の中心とされる。イギリスが東インド会社をここにおいた歴史的経緯もあり、早くから開発が進んだ地域で、州都コルカタの西方160ｋｍのボルプル市には設立100年を越えるシャンティニケタン大学がある。街には学生らしい若者の姿が多く見られ、いかにも学園都市という雰囲気が漂っている。この大学は、海外からの留学生を多く受け入れている。ちなみに日本からは芸術関係の留学生が多く、古くは明治の美術家である岡倉天心も学び、現在も毎年10人くらいの日本人が留学している。

西ベンガル州の主産業は農業である。ガンジス・デルタに広がる地域で、降水量も多く、米作が中心であるが、輸出用のジュート栽培も推奨されている。インドが誇るノーベル文学賞を受賞したR.タゴールにうたわれたように一面緑なす肥沃で豊かな土地である。しかし、生産性は低い（絵所　1989:160）。1970年代から、高収量品種稲が導入され、二期作が始まり人々の暮らしは改善されたという[4]。



（出所）
http://commons.wikimedia.org（2007.09.01アクセス）

図1　西ベンガル州の県

西ベンガル州の人口は、約8千万人（2001年国勢調査）で、その内訳は、ヒンドゥー主流（general population あるいは main stream）人口が約70％で、指定カースト（Scheduled Castes: SC）人口が23.6％、指定民族（Scheduled Tribes: ST）人口が5.6％である（Maharatna 2005：223）。

ここで、インドの民族について説明しておきたい。インドの人口を人種で大きく分類すると、インド・アーリヤ族、ドラビダ族、モンゴロイド族等である。インドでは、1870年代から国勢調査が行われ、以降10年ごとに実施されている。最初の調査では、人口は民族的起源

表1　西ベンガル州の県一覧

1. Darjeeling	2. Jalpaiguri	3. Cooch Behar	4. Uttar Dinajpur
5. Dakshin Dinajpur	6. Malda	7. Birbhum	8. Murshidabad
9. Bardhaman	10. Nadia	11. Purulia	12. Bankura
13. Hooghly	14. North 24 Parganas	15. Paschim Medinipur注	16. Howrah
17. Kolkata	18. South 24 Parganas	19. Purba Medinpur注	

出所：http://www.censusindia.gov.in/maps/State_Maps/StateMaps_links/wbengal（2007.09.20 アクセス）

注　No.15 Paschim Medinipur と No.19 Purba Medinpur は、まとめて Medinipur と呼ばれることもある。

（出所）Census of India

によって分類され、民族は「民族起源 tribal origin」として区分された。その後、宗教によって分類されたり[5]などの変遷を経て、1947 年の独立後の憲法（1950 年）で、いわゆるアーリア系でカーストに属しヒンドゥー社会を構成する人々をヒンドゥー主流人口とし、これ以外の人々を、指定カーストと指定民族に分けた（他に、指定民族に分類されない少数民族や「その他の後進諸階級（Other Backward Classes）」がある）。指定民族と分類された民族は、1951 年の国勢調査では、212 であった。以降、分類基準の見直しが行われる度に、その数は増え、1961 年には 427、1971 年は 432、2001 年では 500 を越えている。この少数民族であるが、人口の規模の大きい順に、Bhil, Santal、Gond、Oraon、Munda、Boro である（Bose 2002）。「少数」と言えども、百万人以上の人口を抱える民族が 6 つもあり（表 2　参照）、指定民族の総人口はインド人口の約 8% を占める。

表2　インドの少数民族の人口

（1991 年、単位千人）

民族	人口
Bhil	5,572
Santal	5,216
Gond	2,124
Oraon	1,426
Munda	1,275
Boro	1,221

（出所）Bose 2002: 3 より転記

（2）バンクラ県（Bankura District）

バンクラ県は、西ベンガル州の西方に位置する（図 1 の 12 番を参照）。多少起伏のある地域で、表層の水が流れやすいために、土壌の侵食が起こり、その結果、乾燥してしまう。したがって、バンクラ県での農業には困難が伴い、州の中では相対的に貧困な地域である。（Maharatna 2005 ：222-223）。

バンクラ県は、22 のブロックからなり（図 2 および表 3　参照）、一つ一つのブロックはさらにいくつかの村から成る。

表3　バンクラ県の行政区画（ブロック別）

1. Saltora	2. Mejia	3. Gangajalghati	4. Barjora
5. Sonamukhi	6. Patrasayer	7. Indas	8. Kotulpur
9. Joypur	10. Bishnupur	11. Taldangra	12. Simlapal
13. Sarenga	14. Raipur	15. Ranibandh	16. Khatra
17. Hirbandh	18. Indpur	19. Onda	20. Bankra-I
21. Bankra-II	22. Chhatna		

（出所）Census of India

（3）マドプール村（Madhabpur Village）

マドプール村は、バンクラ県最北の Saltora（SubDistrict）にある（図 2 の矢印参照）。マドプール村は、国勢調査では、「Village」と表記されているが、世帯数 30 の小さな村である。パンチャヤート（後述）の委員を選出できる規模ではないので、隣村のコルカタ（Korkata 30 世帯）と合わせて 1 名、選出している。したがって、Village よりも小さな単位の「Hamlet：Para」と理解する方がむしろ適切であろう。

行政区画の中心であるバンクラ市まであるいは最寄りの大都市であるドルガプール（Durgapur）市まででも車で 1 時間余りかかる。したがって、これらの都市への通勤は難しい。マドプール村にとり、最も近い大きな町はチャンドラ村 (Chandra village) である（図 3　矢印参照）。この村は主要道路沿いにあり、世帯数は 125、ここに住むのはヒンドゥー主流人口と指定カーストであ

る。しかし、この村の産業は農業で、近隣の村の賃労働者を受け入れるほどの規模ではない。

このあたりには、世帯数100以下の集落が散在している(図3　参照)。そして、ヒンドゥー主流人口と指定カーストは同じ村に住むが、指定民族は指定民族だけで集落を構成している様子がみられる。

近くには、ヒンドゥーの聖地であるシシュニア山(Susunia Pahar)があり、巡礼者が集まり、山のふもとには観光用の土産物を売る店が、門前市を成して並んでいる。また、この山の水はミネラルウオーターとして、飲料用に集めに来る人も多い。

2．マドプール村の人々

（1）サンタル民族

マドプール村の村民は、全員、サンタル民族（指定民族）である。ここで、サンタル民族について説明したい。

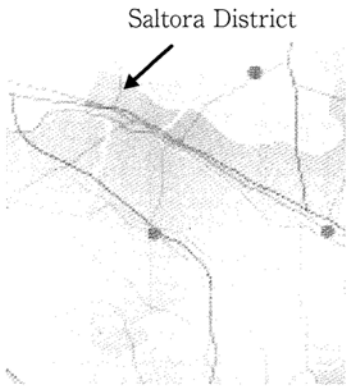
サンタル民族は人口規模でみると500万人を越え(2001年度国勢調査)、2番目に大きい少数民族で、主に東部のオリッサ州、ビハール州、西ベンガル州そしてトリプル州に住む。

人種的には、オーストロアジア語族に属する。指定民族は「アデバシー：adivasi」と言われる。ベンガル語では「adi」は「original」で、「vasi」は「dwellers」すなわち、「住民・人々」の意味である。したがって、「アデバシー：adivasi」は、「先住民族」という意味になる。サンタル民族は、アーリア人が移動してくる以前からインド国内に住んでいたので、まさに「アデバシー」と呼ばれる。アーリア人の進入と共にどんどん居住地域を追われ、何世代もかけて南下して行った。そしてこの百年あまり前からは、かつての居住地域への帰還の動きが始まった。

サンタル民族は、元々狩や採集、移動耕作（Shifting Cultivation）をなりわいとしていた。土地は個人の所有ではなく、共同体の所有で、個人は使用権という形でアクセスを確保してきた。イギリスの植民地支配や、ヒンドゥー主流人口が民族の土地に入り込み、「囲い込み」をしたことにより土地へのアクセスを失った。そのために、森林から得ていた生活資源や移動耕作の土地など生活の糧を失い、近年ヒンドゥー主流人口の村の近くに住み、日雇い耕作などに従事するようになった。農閑期は、日雇い労働（道路工事、レンガ造りなど）をする。

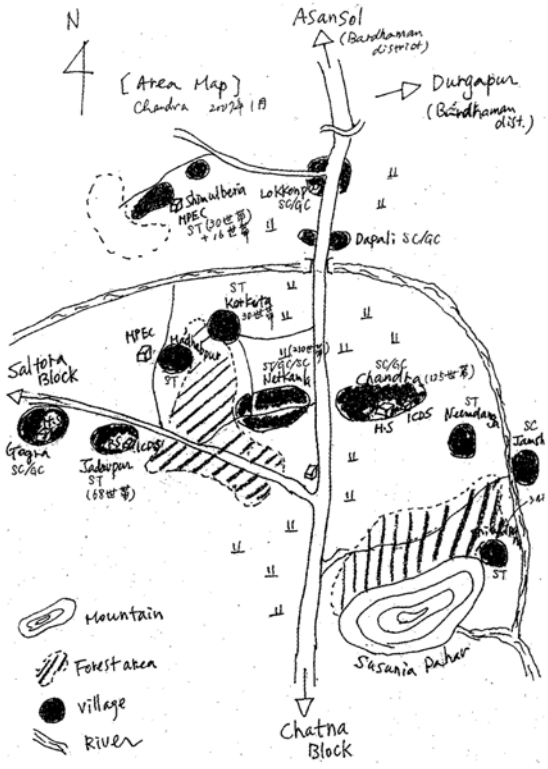
（2）マドプール村の人々

マドプール村は、前述したように、総世帯数は30の小さな村である。世帯主は男性がなることになっている。父系社会で、女性が他の村へ婚出するという村外婚である。マドプール村の国勢調査によるデータは表3にある通りである（表3　参照）。



（出所）
http://en.wikipedia.org/wiki/Image:
West_Bengal_locator_map.svg
2007.12.07 アクセス

図2　バンクラ県



注1　図中の記号：ＳＴは指定民族、ＳＣは指定カースト、ＧＣはヒンドゥー主流人口
注2　図では、「Madhubpur」と表記されている。
（出所）チャタジー公子氏とドルガシャンカール・パルダン氏が2006年作成、2007年1月筆者加筆

図3　マドプール村の周辺

村人の職業は、「農業者（Cultivators）」「農作業従事者（Agricultural labourers）」「家内工業従事者（Workers in household industries）」「他の職業（Other workers）」の４つの分類項目に分けられている。一方、Roy 他は、西ベンガル州の農業従事の形態を３つに分類している(Roy et.al.1998:3)。

A. 農業者（Cultivators）自分の所有する土地で農業に従事する。

B. 耕作者（Mahajans）自分の土地を持たず、土地所有者から土地を借りるという契約で農業に従事する。

C. 日雇い農作業従事者（Landless labourers）土地を持たず、日雇いで農作業に従事する。

国勢調査の場合の農業者（Cultivators）は、Roy 他による農業者（Cultivators）だけを数えているのか、農業者（Cultivators）の他に耕作者（Mahajans）をも数えているのか、不明である。同様に、農作業従事者（Agricultural labourers）も、日雇い農作業従事者（Landless labourers）だけを数えているのか農作業従事者（Agricultural labourers）をも含むのか、不明である。国勢調査の分類基準を調べることが必要となる。ただ、筆者が行った現地調査（2003 年、2007 年）では、自分の土地を所有しつつも家族が生活して行くのに充分な収入がない場合、他の土地所有者のもとへ耕作者として働きに行く場合もあるし、農閑期には日雇い賃労働に従事する場合もあるとのことで、様々な労働形態があるようである[6]。

３　マドプール村の世帯データ

世帯数	30
世帯の平均人数	6.0 人
人口の分類	100%農村人口、100%指定民族
人口	184 人（男 88，女 96）
0-6 才人口	40 人（男 23，女 17）
識字率	36.1%（男 55.4%，女 20.3%）
職業	農業者 68（男 24，女 44）
	農作業従事者 42（男 24，女 18）
	家内工業従事者 0
	他の職業 7（男 7，女 0）

（出所）2001 年の国勢調査を筆者和訳

「他の職業」は、ドルガプール市の工場の労働、石炭鉱山の労働、小学校教員、NGO 職員、警察官、日雇い労働などである。

（３）サンタル民族の村

サンタル民族の家屋は一般に村道を挟んだ格好で左右両側に建てられる（図４　参照）。いくつかの家屋がまとまって、共同の生活の場となる中庭を作る形で配置される。玄関は村道に面して設置される。家屋の壁は牛糞を利用して磨き上げ、いつもきれいに伝統的な模様が描かれている。この絵を描く作業は、女性にとり重要な仕事の一つである。

村の中央には聖なる石（Majhi Than マジ・ターン）がある。祭りや結婚などの伝統的な儀式の際、村長が、この石のそばで儀式を執り行う。この石には腰をかけても構わないが、踏みつけることは厳禁である。

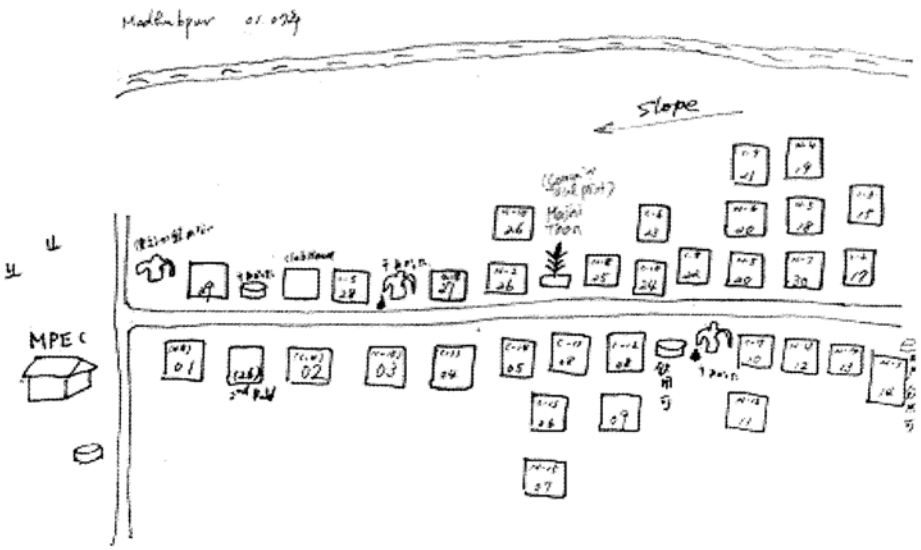
（４）サンタル民族の生活

サンタル民族は、12 の大きな氏族があり、それぞれの姓は以下の通りである（表４　参照）。

多くの場合、いくつかの氏族が一つの村に共同で住んでいるという。たとえば、本稿の対象であるマドプール村では、Murmu、Tudu、Hembrom、Soren、Hasda、Mardi/Mandi の６の姓がみられる。また、筆者が関わっている別な村では、この６つの他に Kisku がある。サンタル民族はいくつかの州にまたがって生活しているので、12 の氏族のうちのどの氏族が多いかという傾向には、地域差があるのではないかと推測される。

結婚に際しては、村外結婚が基本であるが、その場合でも同じ姓のもの同士は結婚できないという制限がある。さらに、異なる姓であっても、Tudu と Mardi、Hasda と Hembrom は結婚には好ましくない組み合わせだという。ちなみに、結婚は、親戚のだれかがアレンジする見合い結婚が多いという。

サンタル民族が楽しみにする祭りはいくつかあるが、一番重要なのが 12 月にある「ショホライ」と春にある「バハー」である。いずれも日取りはベンガル歴にしたがって決まる。その他、「ドルガプージャ」のようにベンガルの祭りに共通するものもある。



注１　家の番号は、世帯調査番号を示す。

注２　図では、Madhabpur は「Madhubpur」と表記されている。

（出所）チャタジー公子氏、ドルガダス・トゥドゥ氏、サローダ・ヘンブロム氏が2006 年に作成、2007 年１月筆者追記

図４　マドプール村の中

表４　サンタル民族の氏族の姓 [7]

1. Kisku	4. Hembrom	7. Tudu	10. Chare
2. Hasda	5. Mardi/Mandi	8. Baske	11. Pauria
3. Murmu	6. Soren	9. Besra	12. Bedea

（出所）Roy, S. et.al. 1998:3

３　村に渦巻く開発の波

ここでは、マドプール村の中で働いている４つの力学、(1) 伝統的行政機構 [8]、（２）政府の開発政策、（３）開発 NGO そして（４）ヒンドゥー化の波について、それらの実態と村人への影響を中心に検討していきたい。

（１）伝統的行政機構

サンタル民族には、年長の男性を中心にした伝統的な村の行政組織がある（表５参照）。村の運営は、表５に挙げた５人の役職と各戸から１人（男性）ずつ出席する全村民集会の全員一致方式で決められる。もめ事が起こった場合もこの伝統的行政機構で解決がはかられる。ここで、解決をみない場合は、近隣の村々の代表（Majhihar　マージハル）が集まり、上位行政機構 (Paraganaits という) が組織され、そこで問題が協議される。ここで問題が解決しない場合は、さらに遠くの村のマージハルが集まる上位の行政組織にあげられ、協議される。この場合、集まるマージハルの数が 200 を越えることもあるという。ただ、このように上位の行政組織に挙げられた場合、代表たちの旅費・食費などはすべて問題を起こした当事者の負担になるので、経費節減のためにも普通は村の中の協議で解決をみるように計られるという。

これらの伝統的行政役職は終身制・世襲制なので、役職に就いている人が亡くなると息子が引き継ぐ。息子がいない場合は、村人（男性のみ）による選挙で新しい人が選ばれる。

この伝統的行政機構は今でも機能しているが、パンチャヤット・ラージ・システムの導入により、指導者の権威は薄れたといわれる（Verma 1990；Shah 2005, p.125)。発展に伴い、教育の普及が進み、伝統的指導者の権威が薄れるのは普遍的に見られる現象である。

（2）政府の開発政策

インドは、貧しい国である[9]。イギリスの植民地支配が国の経済発展を妨げてきたことが大きな原因としてあるが、独立以降、なかなか経済が発展しない理由に膨大な人口が挙げられている（絵所　1989）。貧困が特に集中しているのは指定カーストや指定民族である。指定民族は国の行政が及びにくい遠地や未開の地に住み、「隔離」の状況があるために開発プロジェクトの実施やモニターに困難な状況がある。そのために開発がなかなか進まない。インドはその独立憲法で「すべての国民に等しい権利と機会を保証（第14条）」し、「人種、カーストによって差別することを禁止（第15条）」している。そして、特に、「弱い層」への配慮をもとめている（第46条）。1951年から、指定地域に住む指定民族の福祉の向上をめざした5カ年計画が始まり、第9次5カ年計画が2002年に終わった。これらの5カ年計画の中心課題は貧困の改善で、具体的政策は社会的・経済的状況に応じて変化している。第9次5カ年計画頃より、重点がおかれていたのは、指定民族への教育の普及と女性と子どもの健康である（Pandey 2005）。

インドは前述したように連邦制をとり州の行政は基本的には州政府の管轄である。インドの村落行政システムは「パンチャヤート　ラージ　Panchayat Raj：パンチャヤート制度」とよばれる[10]。西ベンガル州は、共産党政権になってから、パンチャヤート制度が比較的よく機能していると評価されている。農地改革を含む農業政策

表5　マドプール村の伝統的行政機構

順位	サンタル語の名称	職務内容
1位	Majhihar マージハル	村長 — 村の運営と、小さなもめ事の調停・解決。
2位	Paranik パラニック	副村長 — 村長が不在の際に代行する。結婚のアレンジをする。
3位	Nayake(Laya) ナヨク	僧侶 — 宗教的行事の祈りをする。
4位	Kadam Nayake(Daishi) カダム　ナヨク	副僧侶 — 悪霊を追い払う。祭りの企画をする。
5位	Godeth ゴデス	村長の伝達使 — 会議、儀式などの集会を組織する。
6位	Bhadda ボッド	村長を補佐する。

（出所）チャタジー公子とドルガシャンカール・パルダン氏が作成した一覧をもとに、筆者が修正と加筆。

表6　西ベンガル州における地方行政レベル

Level (Rural local body) 地方行政レベル	People's body (Rural local body) 地方行政組織
State 州	Assembly 州議会
District 県	Zila Parishad 県参事会
Sub-Division	（この単位に見合う行政組織はなく、単に行政業務上の便宜から設けられているとのこと）
Block 地区	Panchayat Samity 地区評議会
Cluster （10から12の行政村落群）	Gram Panchayat (Village Council)　村落パンチャヤート ・Gram Sabha 村民総集会
Village 行政村または村	・Gram Sansad（Village Constituency　村民集会） ・Village Development Committee(Gram Unnayan Samity 村開発委員会、20名の委員から成る） ・その他、州政府による各種自助グループがある（SGSYなど）
Community/Hamlet (Para) 集落	ST community（指定少数民族集落） SC community（指定カースト集落）など

注：村人が参加する行政レベルは編みかけした部分になる。

（出所）福永（1989）を基に、チャタジー公子氏が作成、筆者が加筆・修正

や農業労働者の最低賃金引き上げなどが行われ、パンチャヤート制度も強化され成果を挙げているという。

村の行政システムは、基本的にパンチャヤート制度に基づいて機能する（表6　参照）。

（3）開発NGO

インドの貧困は世界的にも有名で、国内外から多くの開発NGOや社会福祉団体が入り込み、各自の理念に基づき、様々な開発プロジェクトを導入し活動している。ここでは、マドプール村で活動している2つの開発NGOを紹介する。

① サービスセンター（Development Research and Communication Services Centre: DRCSC）

サービスセンターは、1987年に設立された開発NGOである。代表のオルデンドゥ・シェーカー・チャタジー（Ardhendu Shekar Chatterjee）氏は農業の専門家である。環境保全型・持続可能な農業と農村開発の推進を目的としている。現在19の協同団体と西ベンガル州をほぼカバーする10県210村で活動を行っている（2007年）。過去5年間では延べ約2万人強の小農民や女性を対象に、食糧の安全確保、小規模農場改善、家庭菜園、農民組合のエンパワーメントなどの活動を展開している。また、トレーニング用、技術交換情報などの資料の作成と配布も広く行っている。その他、持続的農業普及の一環として、村の青少年を対象とする環境教育プロジェクトを実施したり、母子及び学校をドロップアウトした青少年を対象とする多目的教育センターを3県にまたがる5センターを設置したりするなど精力的な活動を展開している。

マドプール村では、2002年春より、持続可能な農業を中心に、家庭菜園や女性グループの導入、多目的教育センターの設置などを行ってきた。

②ルーテルサービス（Lutheran World Services: LWS）

ルーテルサービスは、ドイツの開発NGOである。ルーテルサービスの活動方式は、基本的に（州）政府と連携し、村単位での農村開発を行うというところが特徴的である。政府のお墨付きがあると言うことで、村に入りやすい利点がある。

ルーテルサービスは、2004年冬からマドプール村に入り、活動を始めるようになった。具体的には多収量系統のジャガイモ栽培を勧めた。その際、種イモと肥料と農薬を無料で貸与した。

一般に、一つの開発NGOが活動を展開している村へ他の開発NGOが入り込むことは「道義に反する」行為として避けるものである。開発NGOが活動を開始するにあたり、初期段階で行われる最も困難な作業は村人の組織化である。組織化は、単に村人を数人のグループに分けるという形式的な作業ではなく、村人たちが自分たちの村の課題を探しだし、共有し、主体的に関わって行くという意識化の過程である。これが成立するかどうかがプロジェクトの成否に決定的に関わる。したがって、開発NGOがすでに活動を展開している村というのは、すでにこの最も困難な課題がクリヤされているあるいは進行中であることになる。開発NGOは、その段階が最も困難であることを承知しているので、他の開発NGOのフィールドには手を出さないことが暗黙の了解になっている。しかし、当然のことではあるが、他の開発NGOのフィールドを「横取り」できれば、短い時間でプロジェクトの結果を出せるという利点がある。近年は、開発NGOに資金援助する団体も、「即、成果」を求めがちである。したがって、「道義」には目をつむり、他の開発NGOのフィールドを「奪う」という行為は、途上国の開発現場では「よくあること」である。

2つ以上の開発NGOが村に入り込むことは、村人たちを2分する危険性をはらんでいる。現実に、マドプール村では、2002年にサービスセンターが活動を開始したところへ、2004年、ルーテルサービスがやってきた。村人たちは、どちらの開発NGOと一緒に活動するか皆で検討した。「ものをあげない・住民参加型で時間がかかる」サービスセンター方式と「ものをあげる」ルーテルサービス方式の選択である。村人たちの間に「サービスセンター派」と「ルーテルサービス派」の目に見えない亀裂を生み出し、結果的にはサービスセンターが撤退した（2007年9月）。朝三暮四の例であろうか。しかし、ルーテルサービスの活動期間は3年で、延長しても5年で終了する。その後、マドプール村にどこの開発NGOが入るのかあるいはどこも入らないのか、「先は見えない」。

（4）ヒンドゥー化の波

サンタル民族は、長い間、伝統的な生活習慣にしたがって生きてきた。しかし、ヒンドゥー社会に距離をおき、独立して生活できた時期は過ぎ去った。生活の糧を生み出す自然資源から切り離され、移動耕作から定住型農業に変わり、賃労働を得るためにヒンドゥーの村近くに住むようになった。そのような生活の変化はサンタル民族の村に変化をもたらすようになってきた（Maharatna 2005；Baruah 2003）。人、もの、情報が行き交う時代になり、ヒンドゥー社会との距離をおきながら、生活す

ることが困難になってきている。賃労働をする関係もあり、ヒンドゥーの村近くに住み、ベンガル語を話すようになり、生活習慣もヒンドゥーのそれを取り入れるようになり、徐々にヒンドゥー化されていく（外川　2003：112)。ヒンドゥー社会の中へ入ること、それはサンタル民族としてのアイデンティティーを失い、ヒンドゥー文化を身に付けることである。少数民族が多数民族の中に吸収されていくことは「よくあること」である。しかし、ヒンドゥー社会の中で、指定民族が生きていくことは、カースト規律が厳しい社会で底辺に位置付けられることを意味している。ヒンドゥー化は、貧困からの脱出を意味するものではないし、民族の誇りがどうなるのか気になる。

また、ヒンドゥー社会では近年、サンスクリットへの回帰が言われている。サンスクリットへの回帰とは、「サンスクリット化」である。「サンスクリット化」とは、「簡単にいえば、下位のカースト集団が上位のカースト集団、とくにバラモンの社会規範を取り入れることによって、自己の社会的地位を上昇させようとする動きをさす。ひらたくいえば、下位のカースト集団がバラモンの真似をしようとする（小谷　1989：6)」ことである。

ヒンドゥー化やサンスクリット化によって、サンタル民族の上昇志向が満たされるのか、経済的な豊かさをもたらすのか、気になるところである。

最後に述べておかなければならないのは、すべてのサンタル民族がヒンドゥー化やサンスクリット化のような上昇志向ではないことである。ヒンドゥー化やサンスクリット化への反動か、自文化への回帰志向なのかはまだ明らかにされていないが、自文化への関心が近年高まっていることである（西村　1989：152；Baski & Bhattacharya 2007)。サンタル民族が民族としてのアイデンティティーを求め、誇りを取り戻そうとする動きが見られる。政府も、サンタル民族の子どもたちを対象に、教育用語も低学年ではサンタル語を用いるという画期的な学校の建設に取り組みはじめたと聞いている。この動きがどのように進むのか目が離せない。

（5）民族の女性への影響

ヒンドゥー化やサンスクリット化は、特に民族の女性にとって好ましくない変化をもたらすことが危惧される。ヒンドゥー社会の規範やサンスクリット化の考え方には、女性抑圧の要素が多い。例えば、ダウリ（Dawri 婚資）殺人やサティー、女児の選別中絶や女性の平均寿命の相対的な短命などがつとに有名である。このような非人道的な風習はインドでもヒンドゥー社会特にカースト最高位のブラーミンや中流以上の階級にみられるものであったが、サンスクリットへの回帰の流れの中で下位のカーストが上位のカーストの生活習慣を取り入れるようになっている。

多くの少数民族の間では、女性の地位は比較的高かったこと、性差がほとんどないことが多くの資料に記述されている（Maharatna 2005：29； Chanda 2005：138；Chako 2005； Mukhopadhyay 2002; Verma 1990)。民族で性差が殆どなかったことの証左としてよく挙げられるのが以下の項目である。

① 女性と男性の人口比が小さいこと
② 特に、女児と男児の人口比が小さいこと
③ 結婚年齢が民族では高いこと
④ 出産年齢が遅いこと
⑤ 結婚にあたって、ダウリを払うのではなく、花嫁料（Bride Price）を払うこと
⑥ 労働市場への参入率が高いこと
⑦ パルダの規範がないこと

このような民族の女性の状況が、ヒンドゥー化により影響を受け、悪い方へ変化してきていると指摘されている（Maharatna 2005； Chanda 2005； Chako 2005；Mukhopadhyay 2002； Verma 1990)。すなわち、民族の人々は、ヒンドゥー主流人口より、女児に対する偏見は少なく、かつてその人口は五分五分に近かったのが、女児の数が減ってきている。また、女性は労働力であり、子孫を産むという貴重な存在であることが認識されているため、結婚にあたり花婿側から贈られていた花嫁料が、近年は逆になり、花嫁側が花婿側にかなりの贈り物を要求されるようになっている。これはすなわち、婚資である。ダウリをめぐる花嫁の悲惨な運命についてはすでに多くの資料・書籍などで紹介されている通りである（鳥居　1996；謝　1990；ジャミラ　1984)。ヒンドゥー化は、民族の女性にとっては決して好ましくないことが多い。それにもかかわらず、より上位の生活規範を模倣し、自身を上位にみせようとする上昇志向がおこる。

女性に関することで、追記したいことが一つある。それは、ヒンドゥーの女性も民族の女性も共に土地の所有者になることが確立されていないことである。もちろん、法律的には女性の土地所有は可能である。しかし、父親や夫が死亡した場合、女性が土地を遺産相続できることを誰もあるいは当事者の女性が知らない、あるいは息子に相続させてしまう、あるいはまた夫の親族が相続してしまうなどで、女性が土地所有者となっているケースは極めて少ないという。現在、開発NGOの一つが、西ベンガル州における女性の土地所有についての研究を進めているので、報告を待ちたい。

4　おわりに

近年、インドはIT産業の発展などもあり、一人当

たりのGDPをみるかぎり、年々上昇し経済が向上しているのがわかる。しかし、その発展の恩恵に浴しているのはインド人口の一部で、貧困層を成す指定民族や指定カーストの状況は殆ど変わっていない。国内の貧富の格差はますます広がっている。

農村の開発を進めるために、様々な政策がとられているが遅々たる歩みにしかみえない。農村では、パンチャヤートと開発NGOと伝統的行政組織による開発のプロジェクトが導入され、村人たちはそれらの流れの中に戸惑っているようにみえる。また、ヒンドゥー社会との関わりが増す中でヒンドゥー社会への「同化」が進む一方で、民族としてのアイデンティティーを守ろうとする動きも始まっている。

農村社会の解体は、インドのみならず近代化の道を進んでいる先進国も経験してきたことである。サンタル民族が、ヒンドゥー社会への「同化」と民族のアイデンティティーを守ることをどのように調和させて発展して行くのか、関心が尽きない。

謝辞

本稿作成にあたり、インド国西ベンガル州で活動している開発NGO・Development Research Communication and Services Centre のスタッフであるチャタジー公子氏、ドルガシャンカール・パルダン氏、ドルガダス・トゥドゥ氏、サローダ・ヘンブロム氏にマドプール村およびサンタル民族に関する資料収集・提供の協力を得たことをここに深く感謝する。

本研究は、科学研究費・平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号　18530435）によるものの一部である。

（受理日：平成19年10月31日）

参考文献

絵所秀紀（1989）「経済発展と経済政策」佐藤宏・内藤雅雄・柳沢悠他（1989）『もっと知りたいインド〈1〉』弘文堂、pp.157-182

河合明宣（1989）「農村の百年」佐藤宏・内藤雅雄・柳沢悠他（1989）『もっと知りたいインド〈1〉』弘文堂、pp.257-277

小谷汪之（1989）「インドを見る目　―菜食主義とナショナリズム」佐藤宏・内藤雅雄・柳沢悠他（1989）『もっと知りたいインド〈1〉』弘文堂、pp.1-11

小牧幸代（2003）「英領インド期のセンサスと宗教」小谷汪之（2005）『現代南アジア　⑤社会・文化・ジェンダー』東京大学出版会、pp.11-36

謝秀麗（1990）『花嫁を焼かないで　インドの花嫁持参金殺人が問いかけるもの』明石書店

ジャミラ・ヴァルギース（1984）『焼かれる花嫁　―インドの花嫁』三一書房、鳥居千代香訳

外川昌彦（2005）「村落の自治　―パンチャヤートをめぐる考察」小谷汪之（2005）『現代南アジア　⑤社会・文化・ジェンダー』東京大学出版会、pp.137-157

外川昌彦（2003）『ヒンドゥー女神と村落社会　インド・ベンガル地方の宗教民俗誌』風響社

鳥居千代香（1996）『インド女性学入門』新水社

西村祐子（1989）「生活と宗教」臼田雅之・押川文子・小谷汪之編（1989）『もっと知りたいインド〈2〉』弘文堂、pp.145-173

福永正明（1989）「村の政治」臼田雅之・押川文子・小谷汪之編（1989）『もっと知りたいインド〈2〉』弘文堂、pp.86-98

Baruah, A. (ed.)(2003)*Women in India: An Exhaustive Study*,Anmol Publication, New Delhi

Baski, B. & Bhattacharya, K.(2007) *Celebrating Life/ The Santal Experiment in Freedom/ The Years of a Non-Formal Santal School (1996-2006)*, Ghosaldanga Bishnubati Adibasi Trust, W.B.

Bose, N.K.(2002) *Tribal Life in India*, National Book Trust, New Delhi

Chacko. P. M. (2005) *Tribal Communities and Social Change*, Sage Publications

Chanda, A. (2005) "Tribal Women" Bagchi, J. (ed.) (2005)*The Changing Status of Women in West Bengal 1970-2000, The Challenge Ahead*, Sage, New Delhi, pp.130-141

Ghurye, G.S. (1963) *Scheduled Tribes of India*, Transaction Books, U.S.A. and London

Ishtiaq, M.(1999) *Language Shifts among the Schduled Tribes in India*, Motilal Banarsidass, Delhi

Maharatna, A.(2005) *Demographic Perspectives on India's Tribes*, Oxford University Press, New Delhi

Mukhopadhyay, L.(2002) *Tribal Women in Development*, Publications Division of Indian Govt. New Delhi

Pandey, B.K.(2005) *Rural Development: Towards Sustainability*, Isha Books, New Delhi

Roy, S. et.al.(1998) *Santhal Architectur*, Folk & Tribal Cultural Centre, Kolkata

Shah, B.V.(2005)" Education and Social Change among Tribals in India" Chacko, P.M. (ed.) (2005)

Tribal Communities and Social Change, Sage Publications, New Delhi
Singh, R.(2001) *A Resource Book on The Rights of Indigenous Peoples*, INSAF Publications,Mumbai
Verma, R.C. (1990) *Indian Tribes/ Through the Ages*, Publication Division, Govt. of India, New Delhi

雑誌
アジア経済研究所『アジ研　ワールド・トレンド』
1995年4月号、1997年4月号、1999年4月号、2001年4月号、2003年4月号、2005年4月号、2007年4月号

インターネット
http://www.censusindia.net/results/2001census_data_index.html（2007. 09.25）
http://commons.wikimedia.org/wiki/Image:WestBengalDistrictscurrent.png（2007.9.1）
http://en.wikipedia.org/wiki/Image:West_Bengal_locator_map.svg (2007.12.0)

注記
(1) マドプール村の英語表記には1)Madhabpurと2)Madhubpurの2通りがある。本稿では、インドの国勢調査に使用されている1)の表記に従うものとする。
(2)「民族」は、人類学的に「同一文化集団である」と広義に定義されている。本稿で議論するSantalは、インド憲法に規定されている指定民族である。そして、「tribes」の和訳の意味で「民族」としてつかう。
(3)インドでは、例えば2000年にジャルカンド州がビハール州から独立するなど、州編成が今も起こっており、州の総数は流動的である。
(4) 2006年9月と2007年9月の村落調査での聞き取り。
(5) この部分は、小牧（2003）やGhurye(1963)に詳しい。
(6) 西ベンガル州の土地所有に関する詳細な説明は、河合明宣（1989）を参照されたい。
(7) 姓の英語表記にはついては、研究者によって異なった表記がみられる。本稿では、Roy, S. et.al(1998)にしたがった。
(8) サンタル民族の村の伝統的行政職の名称や数については、研究者により異なる表現が見られる。本稿では、マドプール村の隣の村に生活するドルガダス・トゥドゥ氏の情報に基づくものとする。
(9) インドの一人当たりGDPは、1989年は344（単位は以降も米ドル）、90年は364、91年は318、92年は314、93年は300、94年は338と1990年代の前半は低迷しているが、それ以降95年には370、96年は409、97年は437、98年には437、99年には459、2000年には464、01年は468、02年は482、03年は554、04年は635、05年は733と順調に増えている（アジア経済研究所、各年誌より）。
(10) パンチャヤートについては、福永（1989）や外川（2003）に詳しい。